論文の和文要旨

論文題目	現代日本語の書き言葉における無生物主語他動詞文に関する研究
氏　　名	車　魯明（シャ　ロメイ）

本論文は、現代日本語の書き言葉における他動詞文の主語に無生物が立つ、いわゆる無生物主語他動詞文（例えば「大地震が関東地方を襲った」）を対象とし、大量のデータに基づく考察を通して、その文の表わす事態を全面的に把握し、類型化しようとするものである。

無生物主語他動詞文についてはある程度の研究蓄積はあるものの、分類の基準が曖昧であることや、文における名詞か動詞かの一方しか分析していない、即ち一貫性のある説明が欠けていることなどの問題が残っている。本論文では、まず、分類の原理を明確にし、次に他動詞文の表わす事態全体を検討する。その際、主語名詞のみならず、目的語名詞及び述語他動詞の特徴についても考える。そして、先行研究であまり注目されていないもの、例えば、主語名詞が原因として働く場合や、主語名詞の指すものと目的語名詞の指すものとが位置関係をなす場合などを取り上げ、検討する。

本論文では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて大量のデータを収集し、実例に基づく類型化を行う。その際、実例の観察・分析を重視している。分類の原理は以下のとおりである。

無生物主語他動詞文が成立する場合に大きく 2 つの方向がみられる。1 つは、人に近い性質を持つ無生物が主語の位置に立ち、且つ主語名詞の指すものから目的語名詞の指すものへの働きかけがあるという方向であり、もう 1 つは、外形上他動詞述語文の形になっているものの、事実上主語名詞の指すものから目的語名詞の指すものへの働きかけがほとんどなく、意味的に自動詞述語文に近づくという方向である。合わせて次の 5 つのタイプに分けられる。

・主語が人に準ずるものであるタイプ
・事実上人の行為、感情の表現であるタイプ
・主語が事態発生の原因であるタイプ
・自動詞述語文に相当するタイプ
・他動詞が語彙的な受身動詞であるタイプ、その他

この 5 分類によって、結果的にではあるが無生物主語他動詞文が出現するあらゆる場合を網羅できる。

以下、本論文の各章の内容を要約する。

本論文は第Ⅰ部序論（第1章～第2章）、第Ⅱ部本論（第3章～第8章）と第Ⅲ部結論（第9章）の3つの部分から構成される。

第1章では、本論文の目的、考察対象、用語及び使用する言語資料と調査手順について述べる。

第2章では、無生物主語他動詞文に関する先行研究を論点別に概観し、先行研究の問題点及び本論文との関係を述べる。そして、本論文の立場を示す。

第3章は各論に入る前の総論であり、日本語における無生物主語他動詞文の特殊性と本論文の分類の手順について述べるものである。

第4章～第8章は各タイプについて、無生物が主語に立つ理由と他動詞文の表わす事態、及び主語名詞の文法的な意味を中心に検討するものである。

第4章では、「主語が人に準ずるものであるタイプ」を取り上げ、主語に現れるものを「自然現象」「準自然現象」「組織・機関」「乗り物・機械」の4つに分けてそれぞれ検討する。例えば、「夕陽が町をオレンジ色に染めていた。（預言者の名前）」「広場に面したビルの一階に、合い鍵屋が店を開けていた。（孤狼の絆）」のような文である。このタイプの無生物は人ではないものの、人に準ずる性質を持っている。即ち、それ自体何らかの力を持ち、本質的に他者からの作用を受けなくてもみずから動き、あるいはそのものの本来の性質を以て他者に影響を及ぼし得る存在である。他動詞文は無生物の動きと、他者への働きかけを表現している。

第5章では、「事実上人の行為、感情の表現であるタイプ」を取り上げ、主語に現れるものを「身体部位」「人の側面」「道具」「感情・感覚」の4つに分けてそれぞれ検討する。例えば、「利治の人差し指が、リダイヤルボタンを押した。（カリスマ）」「拍手がわたしを包んでいた。（銀盤カレイドスコープ）」「不安が亜紗見たち三人を襲う。（壊滅！臓器密売ルート）」のような文である。このタイプは、無生物を実際コントロールしている人が潜在的に存在している。動きは事実上その人を通して実現するものの、構文上その人を主語の位置に立てず、事態を直接に引き起こしたものだけを切り取って主語に据え、表現されている。他動詞文は人の動きや、人の身の上に何らかの心理的あるいは生理的な変化が生じることを表現している。

第6章では、「主語が事態発生の原因であるタイプ」を取り上げ、「原因主語」の判別基準を明確にしたうえで、主語名詞を「出来事」「具体物及びその性質」「時間・空間」の3つに分けてそれぞれ検討する。例えば、「また、テレビの出現が、酪農家の生活に娯楽をもたらした。（北海道酪農の生活問題）」「大量に撒かれたコマセ（寄せ餌）が海中で腐り、海を汚す。（雑想小舎便り）」のような文である。このタイプは、主語名詞の指すものがそれ自体の変化や何らかの性質などによって目的語名詞の指すものに影響を及ぼし、場合によって目的語名詞の指すものに何らかの変化を引き起こすことを表現している。無生物が事態発生の原因あるいはきっかけとして機能している。

第7章では、「自動詞述語文に相当するタイプ」を検討する。本章ではそれぞれ主語名詞と目的語名詞との意味関係、目的語名詞と述語他動詞との意味関係に注目し分類を行う。合わせて「位置関係」「全体部分（全体側面）関係」、「慣用句」「慣用句に相当するもの」の4種類に分けている。例えば、「二階建ての四角い建物を、ツタのはう石塀がぐるりとかこんでいる。（サイレントビート）」「祭りは静かに終わりを告げました。（広報京丹波）」のような文である。このタイプは、主語名詞の指すものの状態変化や特徴などをめぐっての描写であり、表面上他動詞文の形をとっているものの、事実上主語名詞の指すものから目的語名詞の指すものへの働きかけがほとんどなく、意味的に自動詞述語文に相当する。なお、このタイプの表わす事態には動きがみられるものの、その動きは主語名詞の指すものから目的語名詞の指すものに向けられるのではなく、主語名詞の指すもの自体に及んでいる。

第8章では、「他動詞が語彙的な受身動詞であるタイプ、その他」を検討する。主として受身動詞「受ける」と「浴びる」を対象とし、主語名詞と目的語名詞の特徴及び働きかけの方向という2点から考察する。例えば、「小笠原諸島が米機動部隊の空襲を受けた。（零戦燃ゆ）」「青々とした空を背景に鼠色にくすんだ町並みが明るい陽光を浴びている。（戦場特派員）」のような文である。このタイプは、主語名詞の指すものが動作や影響の受け手であり、目的語名詞の指すものが事実上の動作や変化の主体である。働きかけの方向は目的語名詞の指すものから主語名詞の指すものへという方向である。

第9章は結論である。本章では各タイプの間にみられる関連性を検討し、現代日本語の書き言葉の動詞文において無生物主語他動詞文を位置付けることを試みる。最後に本論文をまとめ、今後の課題を示す。